

家庭での備え

備蓄や非常持出品の準備

食料や水、生活物資は家庭で最低3日以上の備蓄をしてください。食料の流通やライフラインが復旧するまでに3日程度要しますので、3日分の備蓄が目安です。

しかし大規模な災害になると復旧までに1週間以上かかることも考えられますから1週間分以上を備えることが望ましいとされています。



また、非常持出品として、ラジオや懐中電灯、マッチやローソク、救急医療品などを準備しておきましょう。

最近では、写真のように「非常持ち出し袋」として、これらがセットになっているものがホームセンターなどで販売されています。

家具などの転倒防止対策

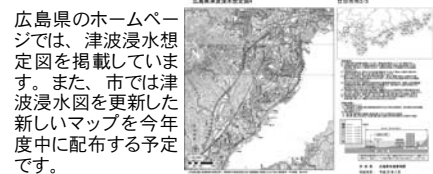
大きな地震が起きると、建物が大きく揺れ、家具や家電製品などが勢いよく倒れてきます。就寝中にタンスなどが倒れてきたら、逃げることもできません。

ホームセンターなどで家具の転倒防止器具が販売されていますので、転倒防止対策を取り、寝室へはなるべく倒

れそうな家具などは置かないようにしましょう。

避難先や避難経路の検討

津波から人的被害をなくすには、とにかく早く高いところへ避難することが重要です。高台へ早く避難するため、普段から、避難ルートや避難する場所、安否確認の方法などを家庭や地域で考えておきましょう。



備える

食料の流通や、ライフラインが復旧するまでには3日程度要すると言われ、大規模災害時には、さらに多くの時間を要します。最低3日分を目安に備蓄しておきましょう。また、災害時に慌てないためにも、日頃からの準備が大事です。



写真上_6月2日に行われた大野地域水防訓練の様子。消防署員や消防団員の指導のもと、水害を想定した土の積み工法や、ロープの使い方などの訓練を行い、大野地域の自主防災組織から48人の参加があった。写真下_3月3日に行われた四季が丘地区自主防災連絡協議会による大規模防災訓練。震度6強の地震を想定し、けが人に治療の優先順位をつけるトリアージや、AED、救命処置などの訓練を行った。

地域の防災訓練に参加を

もしも、大災害が起こったら、消防や警察、自衛隊などは命令に従い、もっとも被害の大きな現場に向かうことが求められます。地元の消防団でさえ、さらに大きな災害現場に向かうため、目の前にいる人を救うのは、現場にいる人たちなのです。

地理、地形など、その地域に必要な災害への備えは、どの地域も同じではありません。実際に起こる可能性のある災害を想定した実践的な訓練を積み重ねることで、いざ災害が発生したときに大きな効果を発揮します。

地域ごとに、さまざまな防災訓練が行われています。災害が起こったときに、「何もできなかった」ということがないように、日頃から地域の防災訓練に参加し、学習しておきましょう。

東日本大震災当時、大野消防署署員だった中原さん。第1次緊急消防援助隊として、3月12日～18日の間、宮城県名取市へ派遣。被災現場で、行方不明者の捜索活動に携わった。その活動経験から、地震・津波災害に対する心構えを聞こう。

震災当日は、大野消防署で勤務中だった中原さん。翌12日朝までの勤務の中、朝方に第1次緊急消防援助隊として、被災地へ向かうよう指示を受けたそうです。選ばれたのは中原さんのほか大野消防署から4人と、消防本部から2人の計7人。それは大野消防署にある消防車両を火災対応の緊急消防援助隊に登録してあったからです。13日の夕方には現地入りした中原さん。「現地に着くまでの

「まぢが消えてしまった」と感じたそうです。現地では広島県隊として活動。火災はほぼ鎮火していたため、生存者を探すことが急務とされました。「72時間を過ぎてしまえば、生存率は一気に下がります。とにかく大きな声を出し、がれきをはぐり続けました」。そして活動中、こんな光景が続いたといいます。「緊急車両で移動する際、あまりにも多くの人が自分たちの車両に向けて頭を下げるんです。『どうかお願いします』といった表情で頭

沿岸部では、「揺れたら、高台へ」。72時間生き延びられるだけの備えをー。

間、あまりにも情報が少ない中、津波や火災、建物の倒壊、何の被害が大きいのか、わたしたちの機材と人員で足りるのか、そこで自分が何ができるのかが不安でした。何より生存のリミットとされる被災後72時間間に合うかどうか、そこが一番大きな不安でした」。大学時代を東北で過ごした中原さん。派遣された名取市にも土地勘があったそうです。しかし、「見渡す限り、すべて津波の爪痕でした。かつて田んぼや商店街があった場所がすべてがれきに埋め尽くされてしまっ



廿日市市消防本部 警防課 なかはら ゆうじ 中原 由二さん

た。そこまで変わってしまったその姿に、

を下げ続けるんです」。それは住民が、他県の消防隊と知って、礼をしたのだと中原さん。その光景を忘れることができないといっています。「被災地で感じたことは、広島とは『地震に対する備えが違う』ということでした。過去に多くの津波を経験し、その教訓も浸透しています。『揺れたら丘へ』という認識がしっかり根付いていました。しかし、それでもあれだけの被害が出てしまったのです。もし、広島で同じ災害が起きたらと思うと少し怖いですね」。

のが、沿岸部では、まず高台へ避難すること。そして、次に重要なのが、避難した先での生活の確保です」と中原さん。「災害が起こってから救援物資が届くまでには、一般的に早くても3日(72時間)掛かると言われています。最低でもその3日間を生き延びるためのものを準備しておく必要があります」。『地震・津波は、いつ襲ってくるかわかりません。出来ることは、普段からの備えだけなんです。防災のためにできることはたくさんあります。だから『今できること』に取り組みんでほしいと思います』。



写真上・下 被災直後の宮城県名取市の様子。中原さんは行方不明者の捜索活動に従事した。